

40 言語聴覚療法部門における吃音臨床の現状と役割—平成 26 年度統計から—

病院 リハビリテーション部言語聴覚療法¹、病院耳鼻咽喉科²、
学院言語聴覚療法³、研究所感覚機能系障害研究部⁴
角田航平¹、君嶋伸明¹、大畑秀央¹、百瀬瑞穂¹、小林美穂¹、北條具仁¹、生方歩未¹、荻野真紀¹、
瀬谷あゆみ¹、中里麻利絵¹、石川浩太郎²、坂田善政^{3,4}、酒井奈緒美⁴、森浩一^{4,2}

【はじめに】当院では、18 才未満の吃音相談は言語新患外来、18 才以上は成人吃音外来において医師が診察・診断、言語聴覚士が評価・訓練を実施している。両外来共に、予約開始から数日で埋まる状況が続く、国内の遠方から来院する患者がいるなど、当院への吃音臨床のニーズは極めて高い。成人吃音の動向については、「成人吃音相談外来の開設と経過」（餅田ら、第 28 回業績発表会、2011）において報告されていた。今回、平成 26 年度に吃音を主訴に当院を受診した小児・成人両者について現状の傾向を分析し、今後どのようなニーズに答えていく必要があるかを検討したので報告する。

【方法】平成 26 年 4 月 1 日から平成 27 年 3 月 31 日の間に、吃音を主訴に言語新患外来、成人吃音外来を受診した患者について、年齢、性別、居住地など、基本情報の傾向を分析した。

【結果】①吃音を主訴に当院外来を受診した患者の総数は、言語新患外来で 54 名（男性 38 名、女性 16 名）、成人吃音外来で 55 名（男性 45 名、女性 10 名）の合計 109 名（男性 83 名、女性 26 名）であった。②初診時の年齢は最年少 3 歳 2 ヶ月、最年長 64 歳であった。年齢層は、言語新患外来においては就学前が全体の 55.6%(30 名)と最も多く、以下中高生が 25.9% (14 名)、小学生が 18.5% (10 名) であった。成人吃音外来では 10・20 代が全体の 49%(27 名)と最も多く、以下 30 代 31%(17 名)、40 代 10.9%(6 名)、50 代 7.2% (4 名)、60 代 1.8%(1 名)であった。③居住地は、言語新患外来では埼玉県が 51.8% (28 名)と最も多かった。成人吃音外来では東京都が 34.5% (19 名)と最も多く、次いで埼玉県が 32.7%(18 名)で、その他北海道・大阪府等 11 道府県からの来院があった。

【考察】特徴として、1) 幼児期から学齢期、成人まで全ての年齢層の受診があった。2) 年齢層で見ると、言語新患外来においては、小学生に比べ中高生の割合が高かった。また成人吃音外来でも、10・20 代の若年層が全体の半数を占めた。小学生は、全国的に設置されている通級指導学級で、相談・訓練対応が可能な場合が多いが、中学校には吃音を対象とする通級指導学級は殆どなく、高校に至っては未設置である。このような現状が中高生の受診割合が高い背景にあると考えられ、当院がこれらのニーズに答えていく必要があると考えられた。3) 言語新患外来では、近隣の市町村からの受診が大きな割合を占めていたが、成人吃音外来では遠方の地域からの受診者も多かった。前回報告時でもこの点は指摘されていたが、依然として全国的に成人吃音の相談機関が不足していることが推察される。今後、全国的に成人吃音の相談が可能となるよう、引き続き当センターから、吃音の臨床・研究・教育、情報発信の役割を果たしていく必要がある。